
限りなく僕を高めてくれる王女

Bugomiel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限りなく僕を高めてくれる王女

【Zコード】

Z5243Z

【作者名】

Buggomiel

【あらすじ】

ゴシック時代のヨーロッパ。

アドリア海沿岸のアルベルジエッティ王国の王子ヨージーンのもとへ、隣国から嫁いできたアレグラ。

美しく、その上武術もたしなむアレグラは、義父ディビッド王を始めアルベルジエッティの人びとを魅了する。

実は武術の苦手なヨージーンだが、アレグラは彼を支え、王子としてのヨージーンの地位を確立させて行く。

読書家のヨージーンは、やがて飛行物体の研究の結果、魔術を操る

王子とあがめられる。

王女アレグラ（前書き）

主な登場人物

ユージーン：アルベルジェットの第一王子

アレグラ：フィオレンティーナの王女だった。今はユージーンの妃

ディビッド：アルベルジェットの王

クラウディア：王妃

デルフィーナ：八年前に亡くなつたアルベルジェットの王女

カイル：第二王子

カプリシオーソ：結婚祝いに王がアレグラに贈つた馬

パスクアーレ：王の秘書官

アルノ公爵：総理大臣

王女アレグラ

「おお、これは」

アレグラは眼下に広がる風景に思わず息をのんだ。

「まずは初めての感想を聞こう。アレグラ、どうかな?」

そこはアルベルジエッティ王国が見渡せる高い丘、フォルリ山の頂だった。振り向けばこの国の国境と、その向こうに連なる荒れ地が見下しきせた。

「見張りを置くには絶好の場所ですね。義父上ちちうえ」

デイビッド・アルベルジエッティ王は、やはりという顔で微笑した。長男、コーディーン王子の嫁アレグラを初めてこの山に連れて来たのだが、彼女なら、この美しく広がる王国の赤い屋根やその向こうに広がる紺碧のアドリア海よりも、この頂上の地の利に目を付けるだろうと思っていた。海からでも、陸からでも、この国に攻め入ろうとする者は、誰であろうとフォルリ山の頂上からの監視を逃れるわけにはいかなかつた。

デイビッド王の見解もアレグラと同じで、この頂上には既に24時間態勢で見張りがおかれていた。

アレグラは幼い頃から馬が好きで、歩き始めるとほぼ同時に乗馬も習い始めた。父親のフィオレンティーニ王から許可を得て、将軍について乗馬の指導を受け、あげくは剣の手ほどきも受けていた。身軽でこちらの兵士よりは筋がよく、練習試合の相手がなかなか見つからぬほどだった。

乗馬も、馬を一目見て僕にしてしまう才能を持ち、どんな荒馬でも乗りこなせるようになつて、10代の始めには將軍の助手としても訓練のときは横についていた。戦いにこそ参戦させてはもらえなかつたが、彼女は何をするにも作戦を立てて事に当たる性格が身に付いてしまつていた。

したがつて、普通の15歳の王女なら、ここからの絶景とも言える美しい景色に感動するところだが、彼女の場合はむしり、戦いにおける重要地點としての意味に关心を示したのだ。

ディビッド王は、そのいかにも頭の良さそうなター・コイズブルーの瞳にじゅうぶん満足していた。彼女なら、武器を持つことの嫌いなコーディーンを補佐してくれるのはないだらうか。

コーディーンも決して頭が悪いわけではない。幼い頃から参謀会議では奇抜なアイデアを提案して、味方の勝利に協力したこと何度もあつた。しかし、剣の腕は弟のカイルより劣つている。コーディーンの名譽のため公の場で一人が剣を交えることは無いが、両方と相手をしている王や将軍の目には明らかだつた。どちらかと言つと物静かで書物を紐解いていることの多いこの長男に王位を譲ることが、ディビッド王としては少し不安ではあつた。しかし、アレグラと協力して戦いを誘導し、業績を上げれば誰も不満は無いであらう。もともとコーディーンは政治経済には長けていて、国を統治する力は充分にあつた。

普段は氣の荒いカプリシオーネが、ヒヒンと鳴き声を上げ、珍しくアレグラに首をこすりつけようとしてくるので、彼女はそれをなだめようとパタパタと首筋を軽く叩く。カプリシオーネは首を一振りして、しゃんと向き直つた。

さすがだ。愛情を込めて接しているが、決して甘やかしたりはしない。

この荒馬を、一週間もしないうちにここまで手なずけられるのは、

おそらく彼女だけだわ。

結婚の祝いに、ディビッシュ王が彼女に与えた美しい白馬。一点の墨も無い白い馬。だが、恐ろしく気位の高い馬でもあった。ディビッシュ王とアレグラだけは、カプリシオーソに振り落とされたことが無い。彼女がこの白馬に乗つて草原を駆け抜けると、その足並みはまるでペガサスに乗つて飛んでいるように思えるのだった。

昨日、王の誘いを受け、三人で遠乗りに出かけた時、コーディーンはこの美しいアレグラが自分の物だとはまだ実感できないでいた。彼女はもつとずつと高く、手の届かないところにあるもののように感じていた。

ディビッシュ王が満足そうに笑みをたたえてアレグラを見ている。今まで自分が父をこんなにも手放しで満足させたことがあるだろうか。特に他の兄弟と比べて差別されているとは思わない……いや、兄弟の誰も、こんなにも父親に愛されていないのではないか。

デルフィーナ…… 八年前、わずか七歳にして事故で亡くなつてしまつた妹。

ディビッシュ王の秘蔵つ子だつた。

奇しくも同じ年のアレグラに、今は亡き愛娘の面影を見ているのだろうか。誰からも愛された天使のような子だつた。確かにコーディーンも、アレグラにはどこか妹を思い起したことがあると思つていた。

もちろん、誰もデルフィーナのことを八年間思い続けていたわけではない。ただ、アレグラを初めて見た時、誰しも心の奥にしまつてあつたデルフィーナのことがよぎつたのは事実だつた。

17歳のコーディーンには、現実に今、目の前を元気良く馬と走り回

るアレグラの方が、ずっとずっと力強く心に響いていた。しかもアレグラは、妹などではない。まさに彼の妻なのだ。

それは、ディビッド王にも手出しができない、紛れもない事実だった。

ユージーンは優越感をこめ、父の後ろ姿に向けて静かにフツと笑つた。

四日前までは会つたことも無かつた彼女が、今はユージーンの心を大きく占めていた。

王子の結婚式

四日前、アルベルジェットイでは盛大な儀式が行われていた。

街の中心に近いサン・ヴィターレ聖堂で、アルベルジェットイ国王、ディビッドの第一王子コーディーンと、隣国フィオレンティーー王国の王女アレグラの結婚式が盛大に執り行なわれていた。

サン・ヴィターレ、外觀は重厚なビザンチン様式の聖堂の中は、驚くほどきらびやかなモザイクで飾られた教会だった。金色がふんだんに使われたモザイクは、高貴な神や牧歌的な自然の物語を綴っていた。黄金を引き立てる高貴な深緑、淡い海の緑、深い赤などがこの上ない色彩のハーモニーを生み出していた。その壮大な大きさとモザイクの芸術は、人びとの信仰の厚さを象徴している。

入堂の時、コーディーンは入口近くの席でアレグラを待ち、司祭に先導されて祭壇までアレグラと一緒に進む手はずになっていた。

コーディーンの待つている位置からは、司祭に連れられて教会の入口まで階段を上つてくるアレグラが見えたのだが、彼女が一段づつ脚を運ぶ度に、重いケープの裾が開いて、膝の形が絹のウエディングローブに浮かぶのが、可愛らしいようでいて艶かしく、コーディーンの心を波立たせた。

花嫁と花婿が祭壇の前に進むまで、全員起立して一人を迎える。

ディビッド王はアレグラがコーディーンには過ぎた嫁ではないかと心の隅で思つていたのだが、二人で司祭に礼をした時に、一度も練習などしたわけではないのに呼吸が合つており、頭を下げる長さが同じだったことに、式典の滞りない未来を感じて満足していた。しかもコーディーンの誓いの言葉が、今までのどんなおごそかな儀式よ

りも堂々としていることに、息子の力量を思い知られたようでは、少なからず驚かされていた。

司祭による祝福の祈りの後、ユージーンがアレグラのヴォールを持ち上げると、静肅なはずの聖堂のあちこちから思わず「ほほっ」というため息が聞こえた。

彼女のたぐいまれなる美しさは、人びとの胸をときめかせた。波打つ金色の髪で縁取られた真珠色の肌、深いター「コイズブルー」のしつとりとした瞳で見つめられると、誰もが我を忘れてしまう。唇もサクランボのように輝いていた。

ディビッド王の横で、クラウディア王妃も思わず息をのんだのを彼は聞き逃さなかつた。絶世の美女と譽れ高いクラウディアをうならせるとは相当なものだ。

ユージーンはときめきを胸にしまいこみ、ヴォールを持ち上げると彼女の?に軽くキスをして、アレグラの顔をうつすらと赤く染めさせた。いかにも女性に慣れしているディビッド王でも、ここまで冷静にできないのではなかろうか。

ユージーンがアレグラに魅了されていなかつたわけではない。ただ彼は、必要な時に心を切り離して集中する術心得ていただけだ。指輪の交換、証書への署名を滞り無く行ない、聖歌によつて式典は無事終了した。

式典の後のパレードで、本来ならばアレグラは裾の長いドレスを着て馬車に乗るところだが、ギリシャの神のよつに仕立てられた衣装で馬にまたがり、ユージーンと並んで一頭の馬に乗つて国民の祝福を受けた。さすがにこのときはまだカプリシオーソには会つたことも無かつたので、他の馬が使われた。晴れの舞台で、王子の妃が民衆の前で落馬でもしたら大変なことになる。

民衆の反応は驚くほど盛り上がっていた。

二年前にヨージーンの姉コンスタンツアが北の国へ嫁いだ時は、こんな騒ぎは起こらなかつた。王女が旅立つこと、王女を花嫁として迎えることには大きな違いがあるが、まあ正直に言つて、コンスタンツアとアレグラとは輝きの度合いが違う。実は、母親似のヨージーンの方が姉よりも妖艶さにあふれていた。透き通るような金髪を長く伸ばし、後ろになびかせている。目を伏せると睫毛が影を落とし、高貴な雰囲気に溢れていた。もし花嫁がこれほどに輝く美女でなかつたら、花婿の美しさの方が際立つていかもしれなかつた。

美しく強いアレグラに、人びとは希望を抱き、夢を膨らませた。少なくともフィオレンティーニと戦争をすることはもう無いはずだ。フィオレンティーニはアルベルジェットに等しいとも言われる大国だつた。それが敵になる恐れが無くなり、それどころか他国との戦争の際に味方になるというのは、国民にとつて大きな希望だつた。だから、この婚礼に恨みを持つ者はまずいないとみて、馬車に乗らなくてもよいといつ結論に達した。

「皆に手を振つてあげなさい」

ヨージーンが耳元でささやくと、アレグラは右手を上げて静かに手を振つた。民衆からは地響きのような歓声が沸き上がつてきて、若い一人を戸惑わせた。

これはただの結婚式なのだ。デイビッド王はまだ39歳、彼の統治力にはみんなが信頼を寄せていた。王の引退はまだまだ先のこと、若い一人が表立つて執り行なう出番はまだ少ない。

銃のない時代だつたが、それでも弓矢で狙われる危険性はある。そこは、かねてから訓練をつんで来たアレグラならば、身を守ることができるだらうといふことで許されたパレードだつた。もつとも、

たとえ馬車に乗っても、祝い事用のものは屋根の無いオープンスタイルだつたから、狙われる危険はさほど変わりはなかつたかもしない。もともとパレードの目的とは花嫁を国民に親しみを持たせることで、その意味ではこれ以上無いほどに開放された行進だつた。

彼女が横にいることが、自分の威力をこれほどに増すことの意味を、ユージーンは深く心に刻んでいた。

婚礼の宴

結婚式から一週間後、宮殿ではヨージーンとアレグラの結婚披露の宴が行なわれていた。

國中の貴族が宮殿に集まり、二人に祝いの言葉を述べる。

庭は飾り付けられ、すべての噴水は勢い良く水しぶきを上げていた。のどかな春の日、数多くのバラが咲き乱れ、甘い香りが狂おしくらいに漂う。

食事の後、クラウディア王妃のハープ演奏が披露されたが、今日はアレグラのお披露目ということもあって、彼女も演奏しなくてはならない。ディビッド王が頷いて、アレグラはしかたなくハープの前に座った。

実を言ひうと、ダンスはともかく、楽器演奏はアレグラの苦手分野である。一応子供の頃から宫廷における様々な教育を受けてきたが、彼女は、静かに女の子らしいことをするのは不得意としていた。特に、皆に注目される場所での演奏などもつてのほかだ。こういうこともありますかと覚悟はしていたが、今は恐ろしく緊張していた。先ほどのダンスのときは、アレグラの軽やかな足取りにみんな感嘆していたが、ここで失態を見せればその好印象も台無しにしてしまう。

深呼吸して弦をつま弾き始める。導入部分は滑らかだったが、しばらくすると音が飛び出し始めた。

その時彼女は、滑らかなハープの音色が入ってくるのを耳にした。

「そのまま、続けて「

斜め横にあつたもう一台のハープを、コーディーンが弾いている。全く同じ旋律を奏でるのではなく、時には伴奏のように、また時にはアレンジして彼女に合わせている。それはまるで、気のあつたハープデュオの演奏だった。アレグラも、彼が加わってからは、肩の力を抜いて自分らしく生き生きと競演を始めた。

二台のハープは響き合い、人びとの心を誘う。二人の手は、最後の音を奏ると同時に宙に止まつた。観客のほとんどは、それがもともと準備された二重奏だと信じて拍手をおくつていた。

「見事な演奏でございました」

賞賛したのは、総理大臣のアルノ公爵だった。その微笑の裏に何か隠されているように感じるのは、彼がアレグラのハープの腕をからかっているのだろうか。心の読めない人だ。

後で、庭に出てカプリシオーソに乗り、見事なジャンプを披露して称賛を浴びるアレグラを、静かに見守るコーディーンの傍に母親のクラウディアが近づいた。

「しようがない人ね、普通は女の方しなみというものは逆なのだけれど……あなたも乗馬より楽器が得意で、一人は案外均衡がとれているのかもしれませんね」

「彼女は、屈託のない人です。母上にとつても、付き合ひやすいことでしょう」

クラウディアは優しく笑いかけた。

婚礼の宴（後書き）

主な登場人物を、第一部の始めに載せました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5243z/>

限りなく僕を高めてくれる王女

2011年12月21日11時54分発行